

森村誠一

非道人別帳〔七〕

地獄坂

文藝春秋

森村誠一

# 地獄坂

非道人別帳 [七]

地獄坂 じごくざか 非道人別帳 ひどうじんべつちよう 七

一九九九年八月十日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者 もりむらせいいち 森村誠一

発行者 和田 宏

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二八〇〇八  
電話東京(〇三)三二六五―一二二一

印刷 凸版印刷 製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合は小社営業部にて送料当社負担でお取替えいたします

© Seichi Morimura 1999  
ISBN4-16-318590-9

Printed in Japan

目次

御落胤事件覚え書 5

忠義腹異聞 41

打ち壊し無惨 79

水子騒動 115

地獄坂 143

お止め鮎秘文 173

三方一命損 213

非道人別帳 主な登場人物

祖式弦一郎

南町奉行所付同心、定廻りの遊軍的存在である臨時廻りに属す。組織のはみ出し者で「葬式」と渾名されているが、悪に向ける嗅覚は抜群。飛燕一踏流の遣い手という

半兵衛

弦一郎の手先。平素は多少の無法も見て見ぬふりをしているので、「知らぬ顔の半兵衛」の渾名がある

茂平次

弦一郎の手先。顔面の連想から「へのへの茂平次」と渾名されている

おこな

弦一郎の下女

藤崎道庵

貧乏人には見向きもしない評判の悪い医者で、「無道庵」と陰口をたたかれている

瀬川主馬

南町奉行所付与力で弦一郎の上司

陣場多門

弦一郎の同僚

板倉重清

若年寄、のち老中。幕閣における弦一郎の理解者

古町権左衛門

南町奉行所の古参同心

下駄六

古町の手先

装幀 多田 進

地獄坂

非道人別帳  
七

町奉行所に保管されている刑事関係諸帳簿、たとえば検使罪過之者留帳、同心検使罪過之者留帳、三十日切尋日切過候伺帳、諸訴刻限留帳、御用覚帳、捕者帳、町廻帳等の中に、非道人別帳という帳簿があった。これは奉行所が取り扱った江戸の犯罪の中で特に凶悪であり、あるいはその所業人道を踏み外す不屈き至極な者どもの犯罪事実を記録した帳簿である。

この作品は江戸町奉行所に保管されていた非道人別帳に基づいている。

御落胤事件覚え書



十月の末から十二月の初めにかけて、江戸市中に三件の殺人が發生した。

最初の事件は、十月二十六日、根津門前町の裏長屋で起きた。この界限は根津権現の境内に許された町家であったが、後に町方の支配となった。

表通りは間口の広い店が軒を並べているが、一步裏へ入ると九尺二間のいわゆるなめくじ長屋が犇めき合っている。長屋の中でも最低の長屋で、わずか三坪の家の中に四畳半一間の居間と、台所と土間がつめ込まれている。

だが、この裏長屋が江戸の庶民、各種職人や日雇い、駕籠舁き、棒手振り（行商人）、車力、馬子などの栖であった。

この裏長屋の一軒で、六十代の老女と二十歳前の男が殺された。凶器は匕首と推定され、いずれも就寝中、蒲団の上から心の臓を一突きに抉られていた。第一撃によって心臓の機能が停止し、

血圧が急激に下がったために出血はほとんどない。さらに蒲団越しに刺しているので、犯人は返り血を浴びていない。

現場に出張<sup>でば</sup>って死体を検分した祖式弦一郎<sup>せしきげんいちろう</sup>は、

「殺しに慣れた野郎だな」

とつぶやいた。

だが、下手人の目的が不明である。障子を開ければ一目で屋内が見渡せる三坪の裏長屋には、盗むような品はなにもない。

この裏長屋は宮永町の山伏寺常春院<sup>じょうしゅん</sup>の持ち家である。大家の常春院天快<sup>てんがい</sup>に聞いたところ、被害者は二年前に京都から流れて来たという母子で、母は万瀬<sup>まんせ</sup>、子は義本<sup>よしもと</sup>と名乗った。

義本の父は江戸の貴人で、都へ上った折、宿所とした公卿邸の腰元であった義本の生母と情を交わして、江戸へ帰った。

その後その腰元は義本を産み、産後の肥立ちが悪く死んだ。生母の従姉妹である万瀬が養母となっていたん義本を引き取り、近所の寺に入れて十七歳まで過ごしたが、二年前、父を探しに二人で江戸へ出て来て、常春院の長屋に入居したということである。

万瀬は近所の仕立て繕いなどをし、義本は日雇いのなんでも屋をしながら、その日の生計<sup>たつき</sup>を立てていた。近所の者は二人が真の母子とおもっていたそうである。

「仲のよい母子で、長屋の評判でしたよ」

「義本さんは色白のいい男で、界限の娘が騒いでおりました」

「楽な暮らしではないはずなのに、その日の稼ぎがいいと、義本さんは長屋の子供たちに菓子など買って来て配ってましたよ。あんないい母子をどうして殺めたりしたんでしょね。一日も早く下手人を捕らえてくださいまし」

と長屋の住人は口々に訴えた。

下手人は十月二十六日の深夜、戸締りなどほとんどしていない二人の長屋に押し入り、就寝中の二人を虫のように刺し殺したものである。母子はおそらく悲鳴もあげず、即死同然に死んだものとおもわれた。

「妙なところに黒子があるな」

二人の死骸を検分していた祖式弦一郎が、義本の死体の一か所に目を止めた。胸の鳩尾の辺りに小豆大の赤みを帯びた黒子がある。肌が白いので目立つ。

「旦那、黒子がどうかしやしたんで」

知らぬ顔の半兵衛とへのの茂平次が覗き込んだ。

「いや、どうもしねえが、死体の父親はやんごとないお方だそうだ。父親が御落胤に黒子のあることを知っていれば、父子の名乗りをあげるとき、いい証拠になるとおもってな」

弦一郎は言った。だが、ついに父子の名乗りをあげる前に殺されてしまった。

そのとき、弦一郎の意識に父親の影がかすめた。父親が本当に高貴の人であれば、立場上、いまさら忘れていた落とし子に名乗り出て来られても都合の悪い事情があるかもしれない。父親が刺客を落とし子にさし向けた可能性は大にある。弦一郎の目が光ってきた。

だが、奉行所の探索にもかかわらず、下手人の手がかりは一向につかめなまま師走になった。十二月七日、芝神明の彫物師熊五郎が殺された。熊五郎は、通称彫熊で通る江戸で名うての彫物師である。

神明はめ組の喧嘩で有名な芝口一帯を受け持つめ組の火消しの本拠である。江戸っ子の気概と意地を競うめ組の火消しの彫物は、ほとんど熊五郎が手がけたと言われる。

その熊五郎が自宅で就寝中、蒲団の上から心の臓を鋭利な刃物で一突きに抉られて死んでいた。手口は万瀬、義本母子と同じであった。盗まれたものはなにもない。

熊五郎は名人気質の彫物師で、気に入らなければ万金を積まれても引き受けない。偏屈の変わり者で通っているが、殺されるような怨みを買ったとはおもわれない。

また熊五郎と万瀬、義本母子の間にはなんのつながりもなかった。

同じ手口の殺人が二件もつづいたとあって、奉行所の面目にかけて必死の探索が行なわれたが、下手人の手がかりは一向につかめなかった。

奉行所の威信をかけた搜索は、なんの成果もないまま二年が経過した。

江戸の十月は冬の門口である。その門口を彩るのが紅葉であった。今日では紅葉は秋の風物であるが、江戸期には『東都歳時記』に「紅楓、立冬より七、八日目ごろより」と記されているように、冬の風物であった。

江戸の紅葉の名所は東叡山、谷中天王寺、滝の川根津権現、目黒祐天寺など、少し後れて鮎洲海晏寺、目黒行人坂などである。この季節には、紅葉の名所は紅葉狩りの人々で賑わう。

また十月一日に冬を迎えるに当たり、炬燵を開き炬燵を出す。江戸城中にも各部屋ごとに火鉢が出る。まだ木枯らしの音は聞かぬが、朝夕は寒さが身に沁みてくる。

かとおもうと、小春月という別名があるように秋晴れがつづき、春のように暖かになる。

風のない夕暮れどきなど、葦の波の果てが小豆色に畑って、春の夕暮れとまちがえそうになる。だが、十月も末ともなると江戸名物の木枯らしが吹き始め、寒さは一段と厳しくなる。同じ江戸風物であっても、江戸の華と呼ばれる火事が、北風に乗って恐ろしい紅蓮の花弁を開く季節でもある。

このころ目黒白金村の豪農高坂大五郎の屋敷に陣取った無動坊改元なる修験者が、將軍の落胤を名乗って、幕府に將軍との父子対面を要請してきた。

無動坊改元の申し立てによると、現將軍が部屋住みのころ、京都へ旅行した折滞在した公卿の持明院基清邸で接遇にあたった万里という女官と情を交わして生まれたのが改元であるという。

色白く、切れ長の目に鼻筋が通った面立ちは気品があり、いかにもやんごとない生まれをおもわせる。弁舌爽やかで、柔らかく的確な言葉遣いは説得力があつて、話相手をいつの間にか魅了してしまふ。

万里は改元を出産後、産後の肥立ちが悪くて間もなく死んだが、改元はその後、京都の円光寺に十七歳になるまで預けられ、この度出府したという。

將軍は改元の誕生を待たず江戸へ帰ったが、その際、証拠の品として墨付きと短刀を万里に託し、改元は生母から証拠の品をもらって持っているという。

改元が將軍の御落胤という噂を聞きつけた江戸に溢れた浪人たちが、改元が將軍から認知されれば大名に取り立てられることを予測して寄り集まって来た。

浪人だけではなく、大名御用達を望む商人や、改元を通し公儀への伝を求め人間たちが群れ集って来た。彼らは改元の卑しからざる人品骨柄と、恭しく捧持している証拠の品に御落胤まちがいなしと判断して、御用金あるいはお支度金と称して金品を争うようにして拠出したので、改元の資金は潤沢であった。

彼の後見人には根津宮永町の山伏、常春院天快が付き、これに家老、用人、番頭、近習頭、大目付、勘定方などと役付けた浪人が侍っている。

高坂大五郎の家の玄関には葵の紋を散らした幔幕を張りめぐらし、將軍家御落胤無動坊改元様御宿と麗々しく書いた看板を立てている。

白金村は町奉行の支配になる。無動坊の申し立てを受けた町奉行所は当惑しながらも、幕閣に報告した。

無動坊改元なる修験者が將軍御落胤を名乗って、日に日に勢いが盛んであることは奉行所の耳に達していた。だが、奉行所としても無動坊の落胤の真偽が確かめられるまでは下手に動けない。偽者とわかれば、有無を言わさず引っ立て、將軍御落胤を騙る不届き者として処刑できるが、もし本物であれば、その扱いをまちがえると奉行がいくつ腹を切っても足りなくなる。改元とし

ても、なんの証拠もなく將軍落胤を名乗り出るはずがない。

奉行所から報告を受けた老中は、ともかく將軍に言上した。

將軍は驚きの色を隠さなかったが、万里なる女性には心当たりがあると答えた。無動坊改元の申し立ては俄然信憑性が強くなった。

だが、真正の落胤と確かめられても、新たな問題が持ち上がる。

元禄期の高度成長は終わり、いまや世界有数の消費都市に発達した江戸は、構造的不況に悩まされ、幕府財政は逼迫していた。諸大名の財政も火の車で、参勤交代や江戸邸の維持費に四苦八苦している状態である。

落胤と確認されても、これを養う余裕はない。將軍落胤となれば、少なくとも一万石以上の大名に取り立てなければならぬが、そんな知行地はどこを探してもなかった。

ともかく幕府では、改元の申し立てにしたがい、彼の出生地京都に使者を派して、持明院基清邸、円光寺、その他関係者を調査した。

その結果、彼の申し立て通りであることが裏づけられたが、すでに生母の万里は病没し、当時を知る者もあらかた死亡、あるいは離散し、行方知れずになっている。

また改元が十七歳まで身を寄せていた円光寺は二年前の火災で焼け落ち、寺は絶えてしまった。生母の死んだ後、養母がしばらく引き取っていたそうであるが、その養母もすでに故人となつていくという。

結局、改元が將軍の落胤だという確たる証人は現われず、証拠は改元が生母よりもらったと称

する形見の品だけとなった。

## 二

十一月に入ると、江戸の寒さは一段と厳しくなる。人通りがめっきり減って、だだっ広く感じられるようになった往来を、木枯らしが土埃を巻き上げながら吹き抜けるようになる。師走になるとまた忙しくなる市中の通りも、十一月は寂しい。

十一月は庶民が待ちかねている芝居町の顔見世狂言の初日であるが、金と暇のない者には縁がない。木枯らしの吹かない日は冷たい時雨がびしょびしょと町を湿す。こんな日に往来を歩いている者はよんどころない用事を背負った者ばかりである。

それでもこの月の酉とりの日は、各地のお祭り神社は酉とりの市で賑わい、熊手を抱えた人たちが通りを歩いている。

この月に酉とりの日が三回ある年は火災が多いと言われる。今年は幸いにして酉とりの日は二回しかない。

十一月初旬のある日、祖せ式弦一郎しきげんいちろうは老中板倉重清の私邸に呼ばれた。老中が奉行所の一介の同心を直接呼びつけるということは異例である。

だが、重清は弦一郎に砂屋勘兵衛の不正事件（「愛の申」・第二巻『毒の鎖』収録）以後、絶対の信頼をおいている。重清が弦一郎を私邸に呼びつけたのも、二人の間の身分差を考慮すると同時



に、その用件の尋常ならざることを予感させた。

「祖式弦一郎、お召しを受けてまかり越しました」

弦一郎の来るのを待ちかねていたらしい重清は、彼を早速奥まった部屋で引見した。

「大儀である。其方の活躍は耳にしておるぞ」

重清はねぎらいの言葉を弦一郎にかけた。

「畏れ入り存じ奉ります」

「近う寄れ」

重清は弦一郎をさし招いた。

弦一郎が遠慮せず、重清の近くまで膝行すると、

「其方と呼んだのはほかでもない。其方も近ごろ、上様御落胤を名乗る無動坊改元なる修験僧のことは耳に入れているであろうの」と言った。

「御意」

「其方、無動坊をどうおもうか」

「ははっ」

弦一郎は重清の質問の真意を探るように、重清の表情をうかがった。

「其方のおもうがまを率直に申してみよ」

「されば申し上げます。無動坊改元なる修験者、なにやら胡散臭うございます」